

美術の窓(16)

開館二十五周年を迎えて
— ガンダーラ彫刻の特別展について —

大和文華館館長 吉川逸治

昭和三十五年秋、大和文華館が、近畿日本鉄道の設立五十周年の記念事業として、佐伯勇社長(現会長)のもとに建設されてから、今秋をもって二十五周年を迎えることになり、このたびは、開館二十五周年記念事業として、コンピュータ・システムを備えた美術研究所を建設し、旧奈良ホテル・ラウンジ(辰野金吾博士設計、明治四十二年建設)をホールとして移築しました。美術研究活動の新分野の開発と大和文華館の観覧の皆様に対するサービス、また文化一般に関する講演やお集り、学術研究のシンポジウムなど多用のサービスのためのホールが備わります。

今秋の特別展は、二十五周年記念特別展として、シルクロードに関連する東西美術文化の交流を示す、従来いわゆる、ギリシア式仏教彫刻と申されてきたガンダーラ彫刻を中心に作品を選び、しかも、これら石彫の仏、菩薩像、あるいは仏伝浮彫が多数を占めますが、その他、諸神像、俗人像の浮彫、塑像も集めて、ひろくシルクロードの途中から今日のアフガニスタン、パキスタン、西北インドの地方で、西方ギリシア、あるいはローマの古典美術伝統の技術によって製作されたとされる彫刻または浮彫で、内容として豊かにインド本来の仏教思想を表現しているところが関心を惹いてきましたが、今日また感興新たにシルクロードの文化の一つとして鑑賞されましよう。

そして、今回は特に、わが国で初公開という優秀な菩薩大像(蓮華手菩薩立像)が所蔵家の御厚意

で出陳することができますし、また、仏陀の光背にカローシュティ文字で三人の女性が寄進したことを記して、制作の由来を示した珍しい像(如来立像)も見事な出来映で注目を惹きます。

ガンダーラの浮彫に、仏伝の多いのは、ギリシア・ローマ系の彫刻師が神話物語や世俗の行事の描写に手練れたところを、ここで彼らには新しい題材を取扱って新鮮さを発揮しているという好例が多く見られます。彫りが深く、人物諸物を立体的に把握してゆく彼らの手法の特徴が簡潔明瞭に現れます。また、数ある塑像のうちボリュームの豊かなこなしに窺われます。塑像となると型にはまり易く、制作の容易さからも、ややもすると民芸的な作品に陥る危険があり、その一歩手前で止って、面白い自由さを発揮するのが、塑像師のこつでしょう。

今度は、バクトリア・ギリシア系の王者からクシャナ、サッサン・イラン系の王者までの銀貨、金貨の優れた例が順序を追って陳列され、ギリシア流の流暢なモデリングの手法を示す作例から、線と平面の処理で、ギリシア系貨幣とは全くちがったアジア系、あるいは初期中世的抽象図形式系統の例とが対比できます。小さなメダルの浮彫の背後に、大きな芸術伝統の存在が看取できるでしょう。

今回の特別展を考えました当初は、古典古代伝統の作例に限定せず、地中海沿岸から太平洋沿岸まで結ぶシルクロードの文化交流を考えて、ギリシア・ローマ系と対照的なアジアの大草原の流動する



蓮華手菩薩立像



如来立像(カローシュティ彫刻)



仏伝図“出城”その他

線の図形、抽象的平面構成の美術伝統の作例をも陳列してはと、考えましたが、これについては、私どもの祖先が、いく千年に渡る間、呪術的な感じのある曲線図形のさまざまな縄文文化を産み、次いでいく世紀の間、精神の目覚めを示す簡単な幾何学形文様文化を作り、銅鐸、銅鉦から古墳と植輪文化に進み、やがて推古期にプリミティブな仏像彫刻が半島から伝わってくる。

紀元前五世紀にフェイディアスがオリュンピアのゼウスの大坐像、ポリュクレイトスがドリュフォロス青銅像を作って、古典像の典型を示してから、ほぼ一千年近くを経ていきます。しかし、わが祖先たちは外国の美術の例に接触すると、進歩は速やかで、古墳時代、サッサンの切子ガラス器が迎えられ、その透明な輝かしい幾何学主義の神秘に魅了せられてから、推古朝の仏、菩薩の人体像の受容へと一段階のぼるのですが、この人体像は古拙像の幾何学主義と、一段と洗練された曲線文様の魔術に伴われて現れます。

そして、この文様の呪縛を払い除けると、中宮寺の菩薩像のように幾何学主義が思惟と感情を整えて豊かになります。これから古典像への段階は、もう一、二段のぼればよいので、薬師寺の金堂の薬師仏と日光、月光の三尊が本格的

な金銅像として造られます。まだ衣變法の処などには従前の幾何学主義の残りが認められますが、自然体の量感豊かな人体、日光、月光の遊脚・支脚とそれに伴う胴体、頭部の屈曲の律動性などギリシア古典像の体軀処理の法則をふまえ、かつ、さらに重要な特徴である威厳ある精神表現を明瞭に達成しています。今日でも御尊像に圧倒されますが、出来あがった当時の人々の感激はどんなだったでしょう。到底想像できるものではありません。

これから以後は、辻成史教授の云うごとき「アイデアの宿り」として、仏像の理念の種々相をここに宿らせることによって、仏陀は、盧舎那仏にも、阿弥陀仏にもなり給う。菩薩は観音にも弥勒にもとなり給う。しかし、他方、尊像として、古典像は自然体をば崇拜儀礼の不動の形式に則せねばならず、ある程度まで幾何学形式を再び採る傾向があり、これが古典像の形式化に導きます。

厳しい意志力によってつねに支持される必要があるので、ガンダーラの彫刻の優作は、実にこの厳しい自然と闘った人々の仏陀、天帝の善意を信じる強烈な意志力を反映するもので、単なる贅沢な覇者や隊商の豊かな生活への願望だけではこの造像の規律は維持できなかったでしょう。

季刊 美のたより No.72

昭和60年 9月 6日

発行 大和文華館